

佐渡鉱山と朝鮮人労働者（1939～1945）

The Sado mine and Korean workers, 1939-1945

広瀬 貞三*

目 次

-
- はじめに
- 1・佐渡鉱山への朝鮮人戦時動員
 - (1) 佐渡鉱山と朝鮮人
 - (2) 佐渡鉱業所の事業拡大
 - (3) 朝鮮人労働者の戦時動員
 - 2・佐渡鉱山における朝鮮人の労働と生活
 - (1) 佐渡鉱山での労働
 - (2) 佐渡鉱山での生活
 - 3・日本の敗戦と佐渡鉱山からの帰国
 - (1) 8月15日と佐渡鉱山
 - (2) 新潟在住朝鮮人の帰国
おわりに

はじめに

新潟県在住の朝鮮人・韓国人に関する研究は、1980年代に入って急速に進んだ。これらの研究はすべて1945年以前の時期を対象にしているのが特徴で、特に1922年の中津川第2発電所朝鮮人虐殺事件と、第二次世界大戦中の朝鮮人「戦時動員」の一環である労働力動員に関心が集中している。こうした研究によれば、1945年8月15日現在、新潟県内約40ヶ所の事業所に、5000名近い朝鮮人が就労中であったことが明らかである。⁽¹⁾

本稿は、この約40ヶ所の一つである佐渡鉱山と朝鮮人労働者の関係を考察の対象とする。佐渡鉱山に注目するのは、二つの理由からである。第一に、新潟県内に戦時動員された朝鮮人の内、最も多くが佐渡鉱山に投入されたからである。佐渡鉱山における朝鮮人の実態解明は、県内の他の事業所を研究する上で、また炭鉱労働の現場と比較する上で意味があると考える。第二に、日本を代表する佐渡鉱山に関する研究が多くの蓄積を見せているものの、そのほとんどが江戸期に限定されているためである。佐渡鉱山経営の成長・発展・衰退の全過程を考える上で、1896年から始まる三菱合資会社（1918年からは三菱鉱業）の経営を明らかにすることは、日本鉱山史研究にも寄与すると考える。

*HIROSE, Teizou [情報文化学科]

本稿は以上の理由から、戦時期の佐渡鉱山における朝鮮人労働者の労働と生活の実態を明かにする。すでにこの問題に関し、長沢秀氏は自ら発掘した新潟県警察部史料と佐渡鉱業所史料によって、その全体像を明かにした。また、佐藤泰治氏もこれらの史料を利用し『新潟県史』で一部言及している。⁽²⁾しかし、これらの研究は専論ではないため、史実の確定と実態の解明はいまだ研究課題として残されている。

本稿では、長沢氏が発掘した二つの史料に加え、新たに新潟県内の新聞、協和会史料などを利用し、以下の三点に注目する。第一に、戦時動員以前における佐渡鉱山と朝鮮人の関係を明かにすることである。第二に、佐渡鉱山における朝鮮人労働者の労働と生活を、より多面的に明らかにすることである。第三に、日本の敗戦後、新潟県内事業所（佐渡鉱山を含む）の朝鮮人労働者が帰国するまでの状況を明かにすることである。

1・佐渡鉱山への朝鮮人戦時動員

(1) 佐渡鉱山と朝鮮人

佐渡鉱山は江戸初期から徳川幕府によって本格的に採掘された日本を代表する金山である。明治維新の後、1869年に工部省の管轄となり、その後農商務省に、さらに大蔵省へと移管され、1889年に宮内省御料局の所管となった。明治政府は欧米の技師を佐渡鉱山に迎え、各種の技術革新を行ない、積極的な採掘を進めた。⁽³⁾

一方、朝鮮政府も1876年の開港以降近代化を急ぎ、1885年からは各監管で開鉱に着手した。1887年5月に鉱務局を設置し、同年6月に永興府使李容翊を咸鏡南道鉱務監理に任命するなど、本格的な採掘に着手した。⁽⁴⁾

宮内省御料局は1889年1月に佐渡鉱山学校（学校長兼教授渡辺渡）を設置した。佐渡鉱山学校は鉱山従業員の子弟を養成し、有能な技術者に育成することが目的だった。学校は正課と予課に別れ、修業年限は正課1年半、予課3年である。開学年の生徒数は、正課87名（採鉱学科27名、冶金学科32名、機械学科19名、建築学科9名）、予課41名だった。1892年4月に第1回目の卒業式を挙行した。第1期生の生徒の中に、東京の工科大学の学生とともに、朝鮮政府から派遣された朴昌圭、具然寿、朴致雲の三名が入っている。彼らは日本語の通訳付きで授業を受けながら、近代鉱山学を学んだ。⁽⁵⁾この3名が佐渡鉱山に入った最初の朝鮮人と思われる。三人とも後に、日本と密接な関係を持つことになる。朴昌奎は1905年3月、日露戦争の「日本戦勝祝賀特派大使」の随員として日本を訪問する。朴致雲は1894年日本軍の東学弾圧に、通

訳として協力する。具然寿は1894年9月現在磁務局主事となり、1895年10月日本が閔妃を殺害した際、その遺体を焼く作業に関わり、この後日本に亡命する。(6)

1896年9月宮内省御料局所管の佐渡鉱山は、生野鉱山、大阪精煉所とともに三菱合資会社に払い下げられた。これ以降、佐渡鉱山は三菱の資本によって経営され、1918年に三菱鉱業の経営となる。三菱合資会社の採掘鉱種は金・銀・銅であり、1897年10月現在の従業員数は2224名である。佐渡鉱業所は、技術面において搗鉱製煉工場等の拡張、青化製煉法の採用、アセチレン携帯燈の導入などの改革を進めた。また、経営面でも、飯米給与制の改正、鉱夫受給人制度の改正などを行った。(7)

佐渡鉱山の労働者の一部は出身によって区別され、島内出身者を「地者」、島外出身者を「他国人」と呼んだ。「他国人」の雇入れや管理は「人夫請負人」である部屋頭があたり、彼らによる「部屋制度」(納屋制度)によって運営されていた。1890年1月現在、鉱場課に所属する従業員数は1946名である。この内訳は、取締23名、支柱88名、運転14名、火焚8名、鍛冶20名、坑夫550名、人足892名、馬丁4名、選鉱夫126名、選鉱婦222名である。このうち坑夫と人足は「地」と「他国」に分けられている。「他国坑夫」は252人、「他国人足」は698人であり、「地坑夫」は298人、「地人足」は194人である。「他国」坑夫・人足の計950名が部屋抱えであり、「地」坑夫・人足の計492名が佐渡鉱山直轄の労働者と思われる。(8)

1890年頃の佐渡鉱山には、大塚平吉、鈴木菊次、安田安平、佐藤金六、太田範七など5人の部屋頭(請負人)がいた。中でも最大の有力者が、大塚平吉だった。部屋頭は他国人の募集、管理、鉱山での採掘、その他の管理を請け負い、配下の鉱夫、人夫を仕事に従事させた。また、彼らは配下の他国人を収容する宿舎を経営した。彼らは事業請負において、鉱山事業主と労働者の中間にあって請負賃金を受け取り、また部屋頭として食料費、物品販売からかなりの利得を得ていた。さらに、以前からの慣習として配下人夫への飯米一括払い下げを受け、その余剰米を取得する立場にあった。(9)

1910年代に作成され、1920年代に一部追加されたと推定される『鈴木部屋古籍調書』、『大塚部屋台帳』によれば、1902年から1929年までに大塚部屋、鈴木部屋に入った「坑夫」、「人足」は計704名である。この内、出身がわかるのは685名である。ここに朝鮮人労働者がすでに現れている。朝鮮人は鈴木部屋に14名、大塚組に7名、計21名(3.1%)となる。鉱山労働者の出身地は44地域と多様である。これを出身別に見ると、長野(172名)、新潟(154名)、佐渡(62名)、石川(34名)、群馬(33名)、富山(31名)に続き、朝鮮は第7位に位置している。

朝鮮人21名の出身は、慶南8名、京畿3名、忠北・忠南・全南・慶北各2名、全北1名、不明1名となっている。⁽¹⁰⁾

「部屋」での鉱山労働者の生活は、次のようである。「部屋というのは配下鉱夫の宿泊する場所で、五間に十間というような大きな建物に、中央の廊下を挟んで両側に八畳位の部屋が並んでおり、一室に十人位が起居していたという。部屋頭は配下鉱夫の食事、起居、勤怠等一切、つまり生活全般についての世話監督をしていたのみならず、鉱山に対して坑夫の身元保証をし、また作業の受負人ともなった。(中略) 大きい部屋頭の下には数人もの小頭がいた、小頭にはその役目によって追い出し小頭(出勤督励の役目)、差込小頭(坑口において配下鉱夫の入坑を点検する役)、坑内小頭(坑内作業場で監督する役)などがあった」。⁽¹¹⁾ こうした労働条件下で、朝鮮人は佐渡鉱山での労働に従事したのである。

部屋制度は佐渡鉱業所の労働力供給に大きな力を発揮した。しかし、その一方では中間搾取の弊害も甚だしく、1899年7月に佐渡鉱業所の鉱山労働者が労働争議をおこした。1900年3月にも600名余が労働争議をおこした。1917年3月にも賃上げを要求して同盟罷業がおこった。また、1922年5月にも650名の鉱山労働者が参加する大労働争議がおこった。このため佐渡鉱業所は1926年1月に労働係を新設し、労務管理を強める一方、部屋制から直営制度へと次第に方向を転換していった。1920年代後半には元小頭の経歴を持つ3名が「世話方」として部屋制度を引き継いでいた。1930年に佐渡鉱業所は最後まで残っていた二人の世話方を「専用労務係」として採用した。これで鉱山労働者はすべて佐渡鉱業所の直轄制に切り替わった。しかし、「世話方」の影響力は残り、部屋制度の遺習が完全に佐渡鉱業所から消えたのは、1935年夏といわれる。この後、相川町のあちこちに佐渡鉱業所直営の坑夫宿舎(長屋)が競って立ちはじめた。⁽¹²⁾

(2) 佐渡鉱業所の事業拡大

佐渡鉱山が第一次世界大戦以降、再び脚光を浴びる契機になったのは、1931年9月の柳条湖事件勃発であった。中国大陸での戦火の拡大により、大量の軍需物資を輸入する代金決済手段として、金に対する需要が増加した。1931年の時点で日本政府の金買上価格は1匁7円25銭だったものが、その後いくたびも買上価格が引き上げられ、1938年5月には14円44銭となった。また、より直接的な金政策として、「産金法」(1937年)、「重要鉱物増産法」(1938年)、「日本産金振興株式会社法」(1938年)などが次々と公布された。⁽¹³⁾

金増産の国策的な要請を受け、佐渡鉱業所では金増産体制を強化した。佐渡鉱業所は低品

位の粗鉱を大量に処理し、しかも実収を高めるために浮游選鉱法を採用し、1932年に泥鉱青化精煉場を廃止して、選鉱場のパイロットプラントとして操業した。さらに、1938年には浮游選鉱場を拡張して、1ヶ月7万トン処理の大選鉱場を建設し、年間産金150kgを目標にした。しかし、これを運営する原鉱が足りないため、佐渡鉱業所は1937年から海岸の浜石、つまり相川湾の相川町に接した海岸一帯の砂利を大規模に採取することになった。これは上流から流れ出た金が川を伝わって海に流れ入り、波浪によって海岸に滞留しているためである。佐渡鉱業所では各種設備を整えたため、表1のように産金量は1938年に1000kgを越え、1940年に明治期以来の最高記録である1537kgに達し、三菱鉱業産金の41.8%を占めるまでに至った。これは北海道の手稲鉱山と並ぶ記録であり、両山で全体の83.6%を占めた。⁽⁴⁾

表1 三菱鉱業産金に占める佐渡産金・手稲産金の割合

単位：kg (%)

年	三菱鉱業	佐渡鉱山	手稲鉱山
1937年	3,262.9	842 (25.8)	139.1 (4.3)
1938年	3,512.3	1,085 (30.9)	277.7 (7.9)
1939年	4,016.7	1,499 (37.3)	659.3 (16.4)
1940年	3,677.6	1,537 (41.8)	1,536.3 (41.8)
1941年	4,965.3	1,100 (22.2)	1,650.5 (33.2)
1942年	4,812.9	1,100 (22.9)	1,282.1 (26.6)
1943年	2,849.8	709 (24.9)	1,152.1 (40.4)
1944年	不明	531	不明
1945年	不明	243	不明

三菱鉱業セメント株式会社総務部社史編纂室編『三菱鉱業社史』(同社、1976年) 432, 435頁。佐渡鉱山の1941年、1942年の産金量は概数である。手稲鉱山の数字は、浅田政広『北海道金鉱史研究』(北海道大学図書刊行会、1999年) 207頁。

こうした金増産は選鉱法の改良、機械化とともに、多数の日本人鉱夫が支えたものである。1931年における佐渡鉱山労働者の姿を、星政之助は「俺達の唄を」と題し、次のように記録している。

「佐渡の金山御国の宝 何時も黄金の花が咲く 壊小長屋から鉱山へ 青白い労働者の行進曲
唄は—まだ明けやらぬ相川の海に広がる ここに千人の生活は固り 目もあてられぬ地底の労働
労働者は入れ替り亦入れ替り長い年月 ここに三菱の王国の一角を築き上げ 鉱山の唄は日
毎に響くが— その唄は俺達の唄だろうか？ 地下一千尺の坑道で 命の綱のカンテラで 囚人
の様にツルハシを振ふ労働者 今日『よろけ』で弊れた二番坑の労働者 不死身のおいらは日
毎によろけ『よろけ』ては紙屑の如く捨てられるおいら 奴等は決してそれを顧みない」。⁽⁵⁾約1
千名の労働者が「よろけ」(珪肺)の恐怖の中で、地底の労働に従事する状況が描かれている。

1936年末、新潟県内で採鉱している主な鉱山・鉱業所は三菱鉱業の佐渡・高千鉱山をはじめ、岩船郡の葡萄鉱山（鉛鉱、亜鉛鉱）、昭和鉱業沼川鉱山、東蒲原郡の日本鉱業三川鉱山（金銀銅鉱）、深戸鉱山（銅鉱）、昭和実業実川鉱山（銅鉱）、北蒲原郡の日本曹達飯豊鉱山（亜鉛鉱、硫化硫黄、鉄鉱）、中蒲原郡の日本鉱業川内鉱山（金銀銅鉱）など11ヶ所であった。⁽¹⁶⁾

佐渡鉱業所が産金拡大に拍車をかけていた1941年12月、日米開戦により太平洋戦争が開始した。戦争が拡大するにつれて金は「海外支払」用として意義が薄れ、金政策は大きな転換を迎えた。日本政府は1943年4月国内の全金山を閉止し、戦争遂行に直接必要な銅、鉄、亜鉛、石炭などの増産、確保に重点を移した。ただし、金山であっても銅その他重要鉱物を同時に産出する鉱山、銅精練に必要な珪酸鉱を産出する鉱山は操業を認められた。⁽¹⁷⁾

佐渡鉱山は金と共に銅も産出するため、これ以降は銅を主として稼行することになった。佐渡鉱業所では浜石採取を休止し、7万t処理の大選鉱場の約半分を設備・建家共に供出した。この結果、生産高は1943年に銅867tと金709kg、1944年には銅890tと金531kgとなったが、1945年には銅180t、金243kgに止まった。⁽¹⁸⁾

1943年8月、椎名悦三郎商工省次官は「鉱山戦士を慰問激励のため」、佐渡鉱業所を訪問した。椎名次官は「一千八百尺の地底に増産の鶴嘴を揮ふ戦士を激励一同と共に東天を拝して後訓示をなした」。椎名次官は佐渡鉱山視察の感想を、「今回の増産週間には割当目標の二割五分を突破し素晴らしい増産成績をあげてゐる（中略）殊に坑内に入つて強く心を打たれたのは地底何千尺の坑内で半島人六分、内地人四分の坑夫達が兄弟のやうに融和し朗かに作業し、しかも戦に勝つため一塊でも多く産出する決意と気魄を示し協力して能率増進に努めてゐることであつた」と述べている。⁽¹⁹⁾

佐渡鉱業所は「重要鉱物増産増強週間」で目標突破の好成績を挙げ、東京鉱山監督局から表彰された。さらに、1943年10月に商工、厚生両大臣からも表彰を受けた。このため、佐渡鉱業所は「全従業員並に地元相川町民に対する感謝慰安を行ふべく30日夜協和会館で万才に浪曲の演芸会を開催する」ことになった。⁽²⁰⁾

佐渡鉱業所では1943年11月から坑内従業員の労働が一層強化された。これ以前から「坑内従業員は作業を終えて帰る時一塊づつ、現場から銅の鉱石を持参し事務所へ提出する」「鉱石献納運動」が展開されていた。これを「一段強化し一人一貫目提出することに改め実施」された。⁽²¹⁾ 佐渡鉱業所は1943年12月8日から一週間「増産週間」を設定し、「全従業員一同は日曜、休暇時間を返上残業して増産⁽²²⁾の拡大に奮闘してゐる」とあるように、増産体制が強まっ

た。²²⁾

1944年8月1日から9月末日までの2ヶ月間、亜鉛、鉄、銅、石炭を対象に全国で「重要鉱物必勝増産期間」が設定された。新潟県内で対象となったのは、三菱鉱業の佐渡鉱山（銅）、日曹の葡萄鉱山（鉛・亜鉛）、日本電気冶金の西川鉱山（鉄）、日曹の飯豊鉱山（鉄・亜鉛）、昭和鉱業の実川鉱山（銅）、日鉄鉱業の赤谷鉱山（鉄）、大倉鉱山（不明）などわずか7鉱山であった。²³⁾このように、敗戦直前まで佐渡鉱山での採掘は続いたのである。

（3）朝鮮人労働者の戦時動員

1937年7月の蘆溝橋事件により日中戦争が全面化すると、佐渡鉱業所は金増産・銅増産のために朝鮮人男性を労働者として大量に動員した。1939年7月日本政府は朝鮮人男性を日本の鉱山、炭鉱、土木の三分野に限定し、労働者として動員すること決定した。1939年度の朝鮮からの労働力導入は8万5000名に決定した。当初は各企業による「募集」の形式を取っていたが、1942年7月から「労務協会斡旋」に変更し、1944年9月から「徴用」によった。これらは日本政府と朝鮮総督府が密接に連携し、国策として遂行された。²⁴⁾

佐渡鉱業所は1939年2月に、朝鮮人の第1陣「募集」を開始した。「募集」地域は忠清南道であった。佐渡鉱業所が朝鮮人「募集」を開始した理由を、当時の労務課員は「内地人坑内労働者に珪肺を病む者が多く、出鉱成績が意のままにならず、また内地の若者がつぎつぎと軍隊にとられたためである」²⁵⁾という。もし、これが事実なら、単に日本人の徴兵による労働力不足を補填するに留まらず、日本人の珪肺感染を防ぐことに狙いがあったことになる。

佐渡鉱業所が1939年に何回「募集」を行い、合計で何名の朝鮮人が佐渡に渡ったかは不明である。労務課員によれば、1939年2月には「一村落二〇人の募集割当てに約四〇人の応募が殺到したほどであった」という。²⁶⁾当時農村は大きな危機に直面していた。1939年7月、8月に朝鮮南部は数十年ぶりといわれる大旱害に見舞われた。罹災者の中には、「一時流言蜚語自暴自棄の言動の続出となり、飼料難に因る畜牛の放売、農務閑散に伴ふ雇人の解雇、生活難に依る婦女子の売買、学童の休退学、職を求めて他郷へ流出する者、乞丐浮浪者に転落する者」が急増した。²⁷⁾こうした農村疲弊の中、生活の活路を見出すため、佐渡鉱業所の「募集」に応募しざるを得なかった朝鮮人は多かったと思われる。

佐渡鉱業所は1940年2月から1942年3月までに、6次に渡って総数1005名の朝鮮人労働者を「募集」で集めた。この内訳は、表2のとおりである。年度別で見ると、1940年は646名、1941年は280名、1942年は79名となり、1940年の数が突出している。1941年のこの数とほぼ一致す

るように、1941年3月佐渡鉱業所は「産金戦士を更に三百名輸入すべく労務課次席横山正三氏が朝鮮へ急行したが今年中には鑿岩機運転台を二百に増加し産金増産目標の完遂に向つて大馬力をかけることになつた」と伝えている。⁽²⁸⁾

表2 佐渡鉱業所における朝鮮人の就労状況（1943年6月現在）

単位：名（％）

年月	1940年2月	1940年5月	1940年12月	1941年6月	1941年10月	1942年3月	合計（％）
募集・斡旋	募集	募集	募集	募集	募集	募集	
出身郡	論山	論山・扶余・公州	論山・扶余	論山・扶余・燕岐	青陽・論山	青陽	
移入数	98	248	300	153	127	79	1,005 (100.0)
雇用期間(年)	3	3	3	2	2	2	
死亡	1	3	0	3	2	1	10 (1.0)
逃走	14	46	51	19	12	6	148 (14.7)
公傷送還	2	0	1	2	1	0	6 (0.6)
私症送還	8	10	6	4	0	2	30 (3.0)
不良送還	6	12	3	3	1	0	25 (2.5)
一時帰国	2	29	31	5	5	0	72 (7.2)
転出	1	31	74	24	0	0	130 (12.9)
減員総数	34	131	166	60	21	9	421 (41.9)
現在数	64	117	134	93	106	70	584 (58.1)
継続就労手続	済	済		済			

佐渡鉱業所「半島労務管理ニ就テ」（昭和18年6月）、『在日朝鮮人史研究』12号（1983年9月）92頁。

佐渡鉱山への連行は、1942年3月以降も続いた。この間の回数や人数は不明だが、1944年7月新たに数十名が動員されている。これは「労務協会斡旋」によるものであろう。7月13日に一行の入山式が佐渡鉱業所の「協和会館」で行われた。竹越鉱山長の訓示、来賓代表堀川相川警察署長の祝辞に次いで、入山者代表「大海昌根」（33才）は「大東亜戦に勝抜くためこの山と運命を共にし決死増産に挺身敢闘せん」と宣誓した。⁽²⁹⁾

敗戦前に佐渡鉱業所が朝鮮で労働者を募集した地域は、忠清南道80%、忠清北道・全羅北道20%だったという。朝鮮人の動員は1945年7月が最後で、労働者だけで「回を重ねて総数千二百名人」だったという。⁽³⁰⁾これに家族まで加えれば、少なくとも1300名近い朝鮮人が佐渡鉱山で暮らしたと推定される。

佐渡鉱山には朝鮮人以外に、日本人の学生や「勤労報国隊」も数多く動員された。1943年8月に「学徒勤労令」が出され、勤労働員は本格化した。佐渡鉱山には相川中学校、相川高等女学校学の生徒が動員された。仕事の内容は、工場では鉄屑整理、鑄造物の運搬、キューボラに入れる石や粘土運び、酸素ボンベ運搬などだった。鳥越坑の鉱石運搬は山の斜面でトロッキを使用するため、危険かつ重労働だった。1945年3月には相川高等女学校の3年生57名が佐渡鉱山選鉱場に出動していた。⁽³¹⁾

また、「勤労報国隊」の一例として、1943年10月に「一日勤報隊」が佐渡鉱山に入った。これは佐渡島内の神職、僧侶などを含む90名で、「坑内深く鳥越の作業現場に突進」し、「鶴嘴を打下し、鉱車を押し終日増産に敢闘した」。また、地元婦人会の79名も勤労奉仕を申込み、二班に分かれて選鉱場で選鉱作業に従事した。³² 1944年3月に佐渡郡内の男性80名、女性50名によって「佐渡鉱山勤労報国隊」が組織され、佐渡鉱山に送り込まれた。³³ しかし、これらはいずれも主に坑外作業であり、坑内作業はほぼ朝鮮人に依存していた。

朝鮮人は佐渡鉱山の他に、相川町から北東24kmにある高千鉱山にも動員された。高千鉱山は金銀銅を産出し、1896年佐渡鉱山とともに三菱合資会社に払い下げられた。1936年12月現在の従業員数は247名、1935年度の産出粗鉱は18568tであった。従業員数、出鉱量ともに1938年、39年がピークだった。朝鮮人労働者が動員された時期は不明だが、「労働者不足を補うため、朝鮮より男四、五〇名が連れてこられた。彼らは閉山（1943年12月＝広瀬）に至るまで、北立島塚の合宿所（相愛寮と称した）で生活した」³⁴ という。おそらく佐渡鉱山に動員された朝鮮人の一部が、高千鉱山に送りこまれたと思われる。

2・佐渡鉱山における朝鮮人の労働と生活

(1) 佐渡鉱山での労働

佐渡鉱業所の朝鮮人に対する基本姿勢は、佐渡鉱業所『半島労務管理ニ就テ』（昭和18年6月）によく示されている。朝鮮人に対して、「全国的労務配置ニ付テ量的ニハ行ク所迄行キタルヤノ観アリ、今後ハ質的向上ニ全カヲ注ギ能率増進ヲ図ル要アルベシ」³⁵ と考えていた。（これ以降、引用註のない引用はすべてこの史料による）。朝鮮から連れて来られた朝鮮人は大多数が農民である。彼らを日本人に絶対服従する鉱山労働者にするために、事前に十分な「訓練」が必要だった。「移入時ハ輔導学校（上中下ノ三学級ニ分チ上級ハ国民学校四年終了程度以上ノ国語理解カアル者、中級ハ稍々国語ヲ理解スル者、初級ハ全然国語ヲ理解シ得ザル者トス）ヲ設ケ三ヶ月間国語教育ニ重点ヲ置キ併セテ規律訓練礼儀作法等内地人生活ヘノ指導ニ務ムル外該期間中屢々講習会ヲ開催シ保安意識ノ徹底ヲ計ル外、就業前係員ヨリ種々操業上ノ注意ヲ与ヘ国民体操等ヲ指導ス」という。つまり、日本語教育と日本人化教育を徹底し、その次に保安意識を持たせることを目的にした。

表3 佐渡鉱業所における民族別職種（1943年6月現在）

単位：名（％）

	日本人	朝鮮人	合計
鑿岩夫	27 (18.0)	123 (82.0)	150
支柱夫	39 (41.1)	56 (58.9)	95
運搬夫	80 (21.4)	294 (78.6)	374
内運転夫	19 (70.4)	8 (29.6)	27
外運搬夫	17 (25.8)	49 (74.2)	66
工作夫	23 (88.5)	3 (11.5)	26
整地夫	46 (68.7)	21 (31.3)	67
製鉱夫	85 (81.7)	19 (18.3)	104
雑夫	52 (82.5)	11 (17.5)	63
其他	321 (100.0)	0	321
合計	709 (54.8)	584 (45.2)	1,293

佐渡鉱業所「半島労務管理ニ就テ」（昭和18年6月）、『在日朝鮮人史研究』12号（1983年9月）93頁。

1942年5月現在佐渡鉱山には表3のように、日本人709名、朝鮮人584名、合計1239名が働いていた。職種別に日本人と朝鮮人の割合を見ると、朝鮮人の割合が高いのは「運搬夫」、「鑿岩夫」、「外運搬夫」、「支柱夫」であり、主に坑内労働である。日本人の割合が高いのは、「其他」、「工作夫」、「雑夫」、「製鉱夫」である。日本人が100%の「其他」とは選鉱婦のことであろう。これから、「運搬夫」、「鑿岩夫」、「支柱夫」という危険な坑内労働を朝鮮人が担ったことがわかる。佐渡金山期の鉱脈は6条（青礬・大立・鳥越・七助・中尾・鰐口）であり、この内、青礬・大立・鳥越の3鉱脈が主要鉱脈だった。佐渡銅山期の鉱脈は旧坑鳥越、鶴子支山などであった。³⁶⁾

1943年8月の採掘の様子を、新聞のルポタージュから見てみよう。

佐渡鉱業所の門には「完勝は日々目標の突破から、増産は不屈不撓の戦意から、勤労と無事故で破れ米英を」の標語が掲げている。午前6時10分、門の南側では相川国民学校の子供数十名が出勤する鉱夫に、「皆さんおはようございます、敵米英に打ち勝つために今日もしつかり増産をお願いします」と声をかける。作業に先立ち、坑内で「一同宮城の方位を拝しまつ暗^{ツツ}な坑道の奥に向つて最敬礼をした次いで戦没将兵並に前線将兵に対し感謝の黙^{ツツ}祷を捧げ、伊勢神宮並に山神を拝礼、そして最後に聲を揃へて共和会綱領を厳かに唱和した」。この後、「職員総掛かりで勇ましい差し込みが始まった」。これは当日の持場の仕事を鉱夫に伝えることである。「佐渡鉱山は全体^{ツツ}の採鉱二組に分け、毎日の採炭成績を掲示して産業戦士の競争心を煽り増産戦果の拡大に努めてゐる（中略）作業は三交代制で朝六時始業午後三時迄を一番方、午後二時半から夜十一時迄が二番方、夜十一時から翌朝六時半迄が三番方」とした。

記者が入った第二組鳥越坑は1942年10月から本格的に採掘し始めたものである。労働は各

組単位で行い、第二組鳥越坑は奈良組長以下職員8名、助手3名で鉱夫（数は不明）を指揮する。「坑内から一里半も入った奥の坑道から危かしい五間梯子を三本登って崩れる石を踏みしめ乍ら進む、ダダ…バンバンと絶え間なくハツパの炸裂する音で身体がぐらぐらツとする、鑿岩機を抱へた若い鉱夫が岩に穴を開けてある孔の中へ火薬をさし入れて爆発させるのだ『ハツパだよツ』と大声を告げて後方へ逃げるやうに下がると鉱夫さん達は一齐に岩の蔭へ身体を避ける、突如炸裂の音と共に岩盤がぐらぐらと揺るぎバラバラと天井から石が崩れ落ちた、前面にポッカー二米近い穴があいて岩盤には素晴らしい鉱脈がきらきらと光りを湛へてゐる。それから鉱石の選別をやり最上鉱と上等鉱二通りに撰分けるそして鉱石を運んで盛り込みの孔の中へ抛り込むの」である。「金山の鉱夫は全部毎日残業をし其の半数は十二時二交代分を働いてゐる」⁸⁰状況だった。

朝鮮人の賃金は、「坑内夫ニ付テハ内地人労務者同様年齢経験等考慮シ業務ノ種類及難易ニ依リ予メ査定セル請負単価ニ依リ其ノ稼高二応ジ支給、極ク少数ノ坑外夫ニ付テハ定額給ヲ支給ス」とある。支払い方法について、「賃金ハ月額ヲ以テ締切り採鉱関係ハ翌月十日、其他ハ翌月六日ニ支払フ（内地人同様）」とある。また、これとは別に「稼働奨励」のため、各種の「精勤賞与」が設けられた。朝鮮人一人当たりの平均月収は1943年4月が83円88銭、5月が80円56銭である。ただし、平均稼働日は明かでない。朝鮮人の賃金には二つ問題が指摘できる。第一に、元農民である朝鮮人にとって技能が要求される「請負制度」は日本人に比べて不利だったと思われる。第二に後述するが、この賃金から労働に必要な道具代等が差し引かれるため、実際手もとに残る賃金はごく僅かであったと思われる。

佐渡鉱業所の労働時間は敗戦が近づくにつれて、長時間化した。1944年8月1日から佐渡鉱業所は三割増産を目標に「必勝増産期間」を設け、「全山火の玉の意気で敢闘を開始した」。同日午前5時半、坑外従業員は山の神県社大山祇神社、坑内従業員は高任神社に集合し、増産祈願祭を挙行了た。「増産期間中各組長以下職員は午前四時半出勤手分けして各寮並に従業員の家庭を巡回出勤を督励すると共にその生活を指導し特に半島人労務者には温かい親心を以て指導し出勤率の向上を図る事になつてゐる」⁸¹という。1944年12月18日に佐渡鉱業所は軍需省から「管理工場」に指定され、「協和会館」で全従業員に「現員徴用令書」が伝達された。⁸²これによって朝鮮人労働者に対する強制度はさらに高まった。

佐渡鉱業所への朝鮮人動員は「募集」形式から始まり、その期限は表2のように本来3年、あるいは2年であった。このため、過酷な労働条件であっても、その期限が終了すれば帰国す

る「契約」だった。しかし、佐渡鉱業所では当初から朝鮮人の「定住化」を計画していた。1941年4月現在、佐渡鉱業所の朝鮮人労働者は約600名だが、家族を伴っているのは50名に過ぎず、大部分は寮で生活していた。佐渡鉱業所では「これ等の半島労務者をして半永久的に留まらしめる方針の下にその家族を順次呼び寄せることとなり今月四十家族約百名、来月八十家族約二百名を迎えるべく準備中」で、さらに朝鮮人学童のために「専門の教師を特置する」計画だった。⁴⁰⁾

「募集」の期間は当初3年だったため、佐渡鉱業所では1942年1月から「募集」期限が終了する朝鮮人が順次現れ始めた。佐渡鉱業所の方針は、有無を言わず「兎も角全員継続就労ノ事」とすることであった。「爾後各個ノ朝鮮現地家情柄、病弱者等帰鮮若ハ一時帰鮮不得巴ル者ニ対シテハ朝鮮現地官辺並ニ地許警察署ト打合ノ上適時送還ノ事」とした。佐渡鉱業所では「継続就労手續修了者ニハ対シテハ適當時期ニ各個ニ個人表彰状ト相当ノ奨励金ヲ授与」することで、朝鮮人の就労「継続」を計った。これらの事実は「募集」形式でありながら、実態は強制労働であったことをよく示している。

慣れない鉱山労働で朝鮮人はどれぐらいの死傷者を出したのであるだろうか。当時の新聞記事からは、佐渡鉱山における事故を確認できない。ただ、1935年7月から佐渡鉱業所で「楽土化運動」が開始している。これは全山従業員980余名の安全保持のために「常時委員」を作り、坑内外の保安につとめることが目的だった。この時点では1日1人平均の事故が頻発しており、今後保全委員の警戒で1ヶ月平均3~5名くらいに、つまり十分の一程度に減少させることが目的だった。この記事から当時「事故」が多発していたことが想定される。⁴¹⁾ 朝鮮人に関しては、表1では10名の死亡者が記録されているもの、具体的な状況は不明である。1件だけ判明しているのは、1942年12月20日、朝鮮人坑夫金珠煥他2名が坑内で梯子の架設中、岩石面より滑り落ち、頭蓋骨粉碎などで死亡していることである。⁴²⁾ この事故が表1の死亡者10名に含まれるかどうかは不明である。負傷者数は明らかでないが、表2の「公傷送還」「私傷送還」を合わせると、36名(3.6%)である。これは坑内労働ができない程度の重症であったと思われる。

朝鮮人労働中の死傷者に対し、佐渡鉱業所は「勤続三ヶ月以上ニ及ビタル時ハ団体生命保険ニ加入セシメ各人在籍中ノ保険料ハ一切会社負担シ万一不幸アリタル場合保険金三百円ヲ贈呈ス、災害ニ対スル扶助、退職ノ場合ノ給与関係等ニツキテハ内鮮区別ナシ」としている。佐渡鉱業所では「佐渡鉱山鉱夫扶助内規」が設けられていたが、これが朝鮮人に適用されたかどうかは不明である。

事故による死傷以外に、朝鮮人労働者を苦しめたと推定されるのが珪肺である。佐渡鉱山は母岩の多くが石英鉱であり、珪酸分が高いことで有名である。そのため、鑿岩作業の際に粉塵（珪酸）が肺に沈着し、繊維増殖が起こって咳や痰がでる。その後、呼吸は苦しくなり、胸部に圧迫感を覚え、それが深化していく。⁴³大正期に作られた「称明寺過去帳」には「安田部屋」所属労働者137名の死亡記録が掲載されている。これによると、平均死亡年齢は32.8歳である。死因は「変死」10名、「窒息」2名、「溺死」2名、「寝入死」1名と、15名の死因が明らかだが、それ以外は不明である。しかし、その多くは珪肺の可能性が高いといわれる。1944年に佐渡鉱業所の珪肺を斎藤謙医師が調査した『珪肺病の研究的試験・補遺』によれば、粉塵の平均概数は鑿岩夫810cc、運搬夫360cc、支柱夫350cc、坑夫240ccである。⁴⁴この時期、これらの職種の比率が高かったのは前述したように朝鮮人であり、この記録も朝鮮人を対象にした調査ではないかと思われる。

佐渡鉱業所は1904年に23床の入院施設を持った病院（鉱山病院）を設置した。これは1934年に改築され、病床数を32床に拡張し、設備も改善して、鉱山関係者の軽費診断所として利用された。⁴⁵佐渡鉱業所は1944年2月に朝鮮人労働者の「健康増進を目的」に保養所を開設した。ここでは「病気疾患の早期治療と精神訓練を行つて」おり、すでに数十人の職場復帰者を出した。「入居者は毎日六時半起床洗面室内清掃後、皇居遥拝皇国々民の誓詞を朗読する、七時半第一相愛寮で朝食⁴⁶座歩行鍛錬をし乍ら鉱山病院に趣き診察を受け九時半帰所、労務課員の講話を聞き昼食、午後五時半入浴、七時夕食、九時消灯就寝」というものであった。⁴⁶ここでいう「病気疾患」とは、以上のような状況から珪肺のことと思われる。

佐渡鉱業所における朝鮮人の闘争は、二件確認される。第一に、1940年2月17日、98名の朝鮮人が働いている現場で発生した。「全員を収容せる合宿所の設備なきため四十余名を暫定的に鉱山職員の経営する新保寮に収容し置きたる所請負制度なる為め賄状況不良なりしとて常に不満ありたるが二月十七日に至り止宿者四〇名は崔在万を代表として之が改善方を要望し不穩の状況にありたるも鉱山側に於て之を容認したる為即日解決せり」という。⁴⁷

第二に、1940年4月11日に佐渡郡桐内町の朝鮮人労働者97名が「三月分の賃金支給を受けた結果応募時の条件と相違すとなし賃銀値上を要求し罷業を断行す」。これは相川警察所の「調停により労働条件につき会社側に於て善処すること々為し」、4月13日に「解決」した。しかし、主謀者の3名は朝鮮に送還された。⁴⁸

こうした争議が発生した理由を、佐渡鉱業所の労務担当者は後に「給与のほかに食費（当

時一日五十銭)や寝具代(一組五十銭)のほか、無料支給と思っていた地下足袋などの作業必需品がすべて本人持ちだったほか、労務や勤労課職員の一部に極端な差別意識を持った人たちがかなりいた」ためと回想している。⁴⁹⁾つまり、「募集」時に労働条件が正確に伝えられなかったこと、日本人の朝鮮人に対する差別が主たる原因であったことの二点が指摘できる。

佐渡鉱業所との直接的な闘争に至らなくても、朝鮮人は逃亡によって自らの健康・生命を守るしかなかった。前掲した表2のように、1940年2月から1948年6月までの3年4ヶ月の間に逃亡者は148名あり、全体の14.8%にも達している。1934年2月の第1陣の朝鮮人は佐渡に来る以前、「下関や大阪に着いてから逃亡した者が多かった」⁵⁰⁾という。この148名の逃亡が佐渡到着前なのか、到着後なのか、具体的な内容は不明である。この表2の逃亡者と重複するかもしれないが、朝鮮人逃亡の事例は次の5件が確認される。

- ①1942年11月4日に朝鮮人労働者4名は賃金低廉、食料不足などの不満から逃亡を企図し、同僚に援助を依頼する。同僚は手数料をとり逃亡させる。
- ②月日不明。朝鮮人労働者(婦人)4名は自由労働者に比べて、賃金が低廉であることに不満を抱き、朝鮮人古物商1名と日本人漁夫2名に逃走・援助を要請した。依頼された3名は世話料75円を受け取り、漁業用発動機船を使って逃亡させた。これが発見され、関係者は検挙され、送局。1943年1月、逃亡した朝鮮人2名に罰金40円の判決が下った。この後、他の2名は再度逃亡した。
- ③1943年2月27日に「金山政治」(19才)が逃走したが、4月18日に発見、検挙され、労働調整令違反で送局された。
- ④1943年3月26日に「新田錫陳他一名」が逃亡したが、同月29日に発見、検挙され、労務調整令違反で送局された。
- ⑤1943年5月1日に「川本栄錫」(35才)が逃走したが、5月3日に発見、検挙され、労務調整令違反で送局された。⁵¹⁾

逃亡者に対する日本の官憲の対応策は不明である。1937年に北海道から佐渡鉱山にきた一労働者は、佐渡鉱業所から労働者が逃亡する様子を次のように語っている。「飯場から逃げた者がいると、すぐさま鉱山の事務所から警察に連絡がいく。そこで小木・夷の波止場では、警察と部屋頭が船に乗る人たちに目を光らせる。もしそこでつかまったら、すぐ鉱山へ引きもどされる。そして折檻された末、いつも見張りをつけられることになる」。⁵²⁾これはおそらく「部屋」から日本人労働者が逃亡した様子を述べたものだろうが、朝鮮人労働者の場合は

より厳しい追及がなされたと思われる。

佐渡鉱業所はこのように朝鮮人が大量に逃亡する原因を、「1・自由放縦且浮動性アル性格ニヨル為、2・附和雷同性ニヨリ計画的逃亡者ニ引ヅラレル為、3・渡来前ヨリノ計画ニヨルモノ」とみなした。この防止策として、「1・官辺、事業主協力徹底的取締ノ強化、2・朝鮮現地ノ近況（内地ノミ戦時生活ニ非ズ）ヲ充分認識セシメル事、3・逃亡仲介者ヲ厳罰ニ附スル事、4・半島労務者ニ対スル世人ノ安直ナル同情心ハ禁物ニテ世人ノ認識ヲ高メル事、5・浮浪半島人ノ使用禁止ヲ厳行セシメル事」と述べている。しかし、最も基本である労働環境の改善は彼らの視野には全く入っていない。

1945年になると佐渡鉱業所では銅採掘の実績が上がらず、朝鮮人労働者は過剰となった。このため、同年8月に第一次挺身隊として189名を埼玉県に、第二次挺身隊として219名を福島県に、計408名を佐渡鉱山から派遣した。福島県組は福島市内の信夫山の中腹を削って、約3万3000㎡の耐弾地下工場（福島工場）を建設する工事に従事した。ここで中島飛行機会社のエンジンを月300台生産する計画だった。福島工場の建設工事は「全国鉱山特別挺身隊」によって行われたという。埼玉県組は削岩機を持って行った組が多かったという。埼玉県内の地下工場は中島飛行機会社の吉松工場と日立航空機会社の八島工場の二ヶ所、軍の地下施設は四ヶ所があるが、佐渡鉱業所の朝鮮人労働者がどの工事に従事したのかは特定できない。⁶³⁾

(2) 佐渡鉱山での生活

1943年5月現在、584名の朝鮮人は相川町内の4ヶ所で生活していた。山ノ神社宅（下山之神町）に117名、第1相愛寮（新五郎町）に185名、第3相愛寮（諏訪町）157名、第4相愛寮（治助町）に124名、その他に1名となっていた。山ノ神社宅は家族用であろう。佐渡鉱業所は「家族持労務者ニハ社宅ノ無料貸与、共同浴場施設、米、味噌、醤油、其他生活必需品ノ廉価配給（直営ノ購買会）及家族傷病ノ場合ノ診察（直営ノ医局）等ヲ実施 単身者ハ寄宿舎（相愛寮）三ヶ所ニ収容シ、舎費ハ徴収セズ 食事ハ内地人同様ノ調理ニシテ食費ハ一日五十銭（実費トノ差額ハ会社負担）寝具ハ使用料一ヶ月一組五十銭徴収シテ会社ニテ貸与、光熱費、浴場費ハ会社負担其他作業用品及衣服履物等日用品ノ購入払下等ニ付テハ前記購買会ヲ通ジ廉価ニ行フ、尚右寄宿労務者ニ対スル炊事ハ共同炊事場（栄養配給所）ニ於テ之ヲ行ヒ蔬菜類等不足ノ折柄、之ガ補給ニ付テハ会社直営農園ヲ経営シ蔬菜豚肉果実等ノ補給ヲナス」としている。このように、佐渡鉱業所は朝鮮人の生活を安定させるため一定の努力を払っていた。直営農園について、新聞は「三菱佐渡鉱業所では使役せる半島人其他数百名の食糧充

足のため相川山之町の山野一町数反歩を耕作し農事技術員を雇ひ入れ甘藷、馬鈴薯を初め野菜物の大量生産に着手し之れに要する肥料を求むる為多数の豚を飼育して居る」⁶⁴と伝えている。

佐渡鉱業所では朝鮮人に現金を所持させないため、賃金を故郷（家族・行政機関）に送金させたり、強制貯金をおこなった。これはインフレを抑制すると共に、朝鮮人の逃亡を阻止することに狙いがあったと思われる。1940年9月忠清南道論山郡出身者代表俞鳳喆を初めとする同郡出身者94名は、同郡守宛に56円60銭を「細民救済」として送金した。これは「美談」として大きく取り上げられた。⁶⁵また、佐渡鉱業所は「貯蓄心ノ涵養方策」として「貯蓄額番付表」を作成したり、「貯蓄奨励金」を附与した。貯蓄には、「国民貯蓄」と「勤儉貯蓄」の二種類があった。1944年8月（日不明）における朝鮮人労働者の「国民貯蓄」額は41109円、「国元送金」は10826円であり、一人当たり106円64銭にはね上がった。この結果、同年9月25日における佐渡鉱山の貯蓄総額（職員・労働者）は90万1000円に達した。⁶⁶

一般的に鉱山の「部屋」や宿舎では賭博が広く行われた。朝鮮人も次第にこの習慣に染まり始めた。朝鮮人は深夜人里離れた藪の中や火葬場で蠟燭を灯して、博打を打った。1941年4月に第一相愛寮で「豊田圭泰」など4名の朝鮮人が「花札賭博の真最中を相川署員に踏み込まれ」、取り調べを受けた。⁶⁷1942年4月にも、相愛寮で李漢鳳など3名が花札で賭博を開帳中、日本人労務課員がこれを発見し、3名を所轄警察署に連行しようとした。同僚朝鮮人160数名はこれを奪還しようとして寮の事務室に殺到し、労務課員に傷害を迫らせ、事務所の窓ガラス36枚が割れた。このため、相川署員が急派し、主謀者8名を検束し、「鎮撫」解散させた。⁶⁸

1944年7月「金田^{不明}章□」（33歳）は会社から提供された作業服1着と坑内から盗みだした三寸二部の釘50本を、一日本人と白米三斗で交換する約束をしていた。しかし、「金田」は白米二斗を受け取りながらこれを守らず、別の日本人と共謀して濁り酒を密造して仲間の鉱夫に一升2円で販売したことで検挙された。⁶⁹

朝鮮では1938年2月に「陸軍特別志願兵令」が公布された。これに続き、1943年8月朝鮮人に対して「徴兵令」が施行された。これは日本に居住する朝鮮人にも適用され、佐渡鉱業所での資格対象者は二十数名であった。大政翼賛会佐渡支部は「右青少年を祝福激励するため」、1943年8月1日午前5時、相川県社大山祇神社で「兵制発展記念壮丁士気昂揚祈願祭」を執行した。佐藤支庁長、山内佐渡鉱山長、堀川相川警察署長、鉱山郷軍分会長片岡少尉の訓示・祝辞の後、朝鮮人「村川華英」は宣誓を行った。⁷⁰新潟県協和会では1943年9月15日から20日間

「内地在住朝鮮人壮丁練成」を、北蒲原郡笹岡村大日原陸軍演習所で行った。新潟県内の対象者は161名だったが、実際の参加者は17才から20才までの54名に止まった。この中には相川支会の1名（慎〇〇）も参加していた。⁶⁰

1944年4月第1回徴兵検査で佐渡鉱業所の朝鮮人は、10名の甲種合格者を出した。同年9月この中の8名（柳村益洙、白川^{不詳}基、新井光郎、金本相培、柳川志男、石原公益、石原鳳周、南蓉益）が入営することになった。「軍歌と旗の波に送られて佐渡鉱山を下つてゆく八人の半島出身壮丁がある、見送る人も見送られる人も皆一様に深い感激と誇りに輝き中には感極まつて涙さへ流してゐる、これは鉱山に働く半島青年が徴兵検査に合格晴れて入隊する朝の感激譜である（中略）今や佐渡鉱山半島人鉱山長屋、感激と光栄と誇りと喜びに包まれてゐる、出発の朝鉱山から贈られた竹越鉱山長以下幹部署名入りの国旗を肩にかけた八君は『皆さん有難う元気に征つて参ります誓つて米英を撃退します』と挨拶した」⁶¹のだった。

佐渡鉱業所で働く朝鮮人労働者の労働と生活は、日本の三つの機関によって管理されていた。第一には彼らを直接「雇用」した三菱鉱業である。佐渡鉱業所では1920年代前半に、労使団体「麗水会」を組織した。こうした労使者団体は炭鉱、鉱山ごとに名称が異なっていたので、三菱鉱業は1932年「協和会」に統一した。1934年2月に「一・国体精神ヲ銘シ、協和一心大義ヲ完ウセシム、二・大御稜威ヲ仰ギ勤業一体奉公ノ実ヲ挙ゲム、三・道義ヲ明ラカニシ、靖和一如、会ノ使命ヲ完ウシム」とすると「協和会綱領」が新設された。協和会は1942年4月に「産業報国三菱鉱業協和会」に改組され、大日本産業報国会の下部組織となった。⁶²

佐渡鉱業所では、「全従業員ヲ以テ組織セル協和会ニ入会セシメ従業員ノ親和修行、救済、待遇改善、能率並福祉増進等ヲ図ル協和会ハ随時映画会講演会、遠足会、運動会（本年度ヨリ体練会トス）、其他祭典催物ヲ開催シ尚各宿舍ニハ娯楽室ヲ設ケ雑誌、朝鮮将棋、蓄音機、ラジオ等ヲ設付ケ慰安娯楽ト趣味ノ向上ニ努ムル外各種救済事業ヲ営ム」としている。事実、佐渡鉱業所は朝鮮人労働者が急増した1941年11月「鉱夫慰安」を目的に、広間町に20数万を投じて「協和会館」を建設した。⁶³また、協和会の行事に朝鮮人も参加した。1943年6月佐渡鉱山の三菱鉱業全従業員による体練大会が山の神競技場で開催された。競技は「職員内鮮労働者女事務員女工さん達の多彩な混合部隊を四班に分け」て行い、最後に5キロ焼夷弾を使用して防火訓練を行った。その後「一同は内鮮協和職場の敢闘を誓つた」という。⁶⁴

第二には、鉱山を統制する半官半民の機関である。1940年に日本金属連合会が設立され、鉱業用資材と労働力統制を行った。1941年12月重要産業団体令にもとづき、鉱山統制会が設

立された。⁶⁶ 鉱山における朝鮮人労働者の急増に対処するため、1943年6月東京鉱山監督局・大日本産業報国会・東京地方鉱山部会は、佐渡鉱業所で「朝鮮人労務者管理研究協議会」を開催した。これは「労務管理ノ如何ハ生産ニ及ボス影響極メテ大ナルモノ有之」ためだった。協議会は3日間におよび、1日は「佐渡鉱山ニ於ケル朝鮮人労務管理状況視察」を行なった。佐渡鉱業所は東京鉱山監督局がモデルとするような朝鮮人管理がなされていたのだろう。

第三に、特高警察による朝鮮人の徹底した管理・取締である。1910年代後半から日本に居住する朝鮮人はすべて、日本の官憲が組織した融和組織に組み込まれた。朝鮮人支配機構は協地域別、業種別でおこなわれていた。徹底した朝鮮人支配のため、協和会が警察署単位で形成された。当初は朝鮮人の多い県ごとに形成されたが、組織を一本化する必要に迫られ、1939年6月中央協和会が結成された。中央協和会の指揮、指導系統は二つあり、一つは中央協和会と府県協和会という線であり、もう一つは内務省警保局—各県警察部—各警察署という系統である。各地域の朝鮮人は、すべて特高の管理下に入った。⁶⁷

新潟県では1939年6月に新潟県協和会が結成された。会長は新潟県知事、副会長は学務部長・警察部長であった。1940年12月末、新潟県協和会の正会員は1959名、準会員は376名、合計2371名である。正会員は朝鮮人のみで、賛助会員は「趣旨に賛同し本会の事業を援助せるもの」であった。県内の警察署単位ごとに、支会23ヶ所を設置した。この中でもっとも正会員（朝鮮人）数が多いのが相川支会の655名で、次いで十日町(250名)、新井(126名)、柏崎(110名)、新津(106名)支会の順となる。相川支会は相川警察署に本部を置き、専任指導員(日本人)4名、補導員(朝鮮人)2名の体制で、佐渡鉱業所の朝鮮人を管理した。⁶⁸ 朝鮮人管理のために新潟県警察部は、朝鮮語の学習を進めた。1941年3月新潟県警察練習所主催で「県下警察官鮮語講習会」が開催された。これには県内42警察署から1名ずつ参加し、三分して各3ヶ月単位での講習を計画していた。⁶⁹

佐渡鉱業所での協和会の活動は、大きく二つに分けられる。一つは朝鮮人の日本人化・皇民化のためのものであり、もう一つは抑圧機構を強化するためのものである。前者としては、朝鮮人労働者とその家族を対象とする「講習会」の実施があげられる。1940年5～6月、「協和事業婦人講習」が県内22カ所の協和会支会所在地で順次開催され、6月4日相川で実施された。県協和会は「半島出身同胞の内地化は先づ婦人から」と考え、婦人講習に力を注いだ。受講者は22会場で、合計719名だった。⁷⁰ また、1941年1月県協和会主催で「協和事業男子講習会」が相川支会を皮切りに県内で開催され、1440名が受講した。講習題目は、「新体制下に置ける

協和会員の使命」(特高課員)、「協和会員と国民生活」(社会課員)、「内鮮協和の諸問題」(支会長)であった。⁷¹⁾ 神社を利用する行事として、日米開戦直後の1941年12月14日、協和会相川支会は「移住半島人労務者の戦勝祈願祭」を開いた。山之神々社々殿で、午前8時から朝鮮人の代表200名が参加して行われ、皇居遥拝、祈願の後、末綱副山長の訓示があった。⁷²⁾

後者としては、まず地元有力者に対する啓蒙活動がある。1941年11月新潟県協和会は「戦局下協和事業の円滑なる進展を図り、併而各種事故発生防止のため」、中央協和会の常務理事を迎え、相川警察所で「募集朝鮮人労務者に関する懇談会」を開催した。佐渡鉱業所の朝鮮人に関する「懇談」が行われ、地元から相川警察署長、相川区裁判所員、県会議員など18名が参加した。⁷³⁾ 特に重要なのは、補導員の教育だった。1941年11月新潟県協和会は長岡市で「協和事業補導員練成大会」を開催した。受講者は合計50名で、相川支会からは大川亀松、「松本明錫」、元村義常、大野茂の4名が参加した。⁷⁴⁾ 1942年3月補導員を伊勢神宮、橿原神宮に参拝させ、「敬神思想ノ普及並皇国精神ノ涵養」を目的とした「補導員移動講習会」が開催された。これには相川支会の「松本明錫」が参加した。「松本」は「私は此の講習に依つて授けられた智識を依て相川支会の会員を指導敬蒙してより皇運を扶翼し奉らしむると共に産業戦士たる本分を完うすべく微力を尽す覚悟である」とその決意を語った。⁷⁵⁾ また、1943年5月「協和事業補導員練成講習会」が瀬波町で開催され、36名の受講生があった。これには相川支会から「青山武雄」、「岩本小宗」の2名が参加した。⁷⁶⁾

3・日本の敗戦と佐渡鉱山からの帰国

(1) 8月15日と佐渡鉱山

1945年8月15日、日本の敗戦で太平洋戦争は終結した。同日畠田昌福新潟県知事は「知事謹話」を発表し、県民に対し軽挙盲動を慎むように説いた。⁷⁷⁾ 新潟県民にとって敗戦は大きな衝撃であったが、強制的に新潟に動員された県内約40事業所の朝鮮人にとっては解放の日だった。475人の朝鮮人がいた電気化学工業青海工場では、日本人「従業員ノ衝撃悲観ヨリ之(日本の敗戦=広瀬)ヲ知得シカーバイド電気炉労務者係一部ニ在リテハ拍手シ快哉セル」との状況であった。⁷⁸⁾ また、同日日曹飯豊鉱山、日鉄赤谷鉱業所があった新発田市では、玉音放送で打ちひしがれる日本人に対し、「すぐ近くの松林に強制収容され、労働にかり出されていた朝鮮人の一団が、トラックの音とともに歓声を上げて過ぎ去って」いった。⁷⁹⁾

朝鮮人を抱えた企業の反応は早かった。45名の朝鮮人がいた中央電気田口工場では、8月17

日に臨時役員会を招集し、①軍事占領された時、軍部との関係を隠匿するため軍部との往復文書は全部焼却する、②「半島応徴士」の取扱いは田口在住の朝鮮人「青山仙太郎」に依頼するなどの実施を決定した。⁸⁰⁾

佐渡鉱山では8月15日現在、244名の朝鮮人が労働に従事していた。翌8月16日に相川警察署長、特高係、佐渡鉱業所の三者は、敗戦による朝鮮人坑夫の「稼働率低下」を防ぐため、「指導会」を開催した。佐渡鉱山へは敗戦直後から、第1次、第2次「特別挺身隊」として派遣されていた朝鮮人が戻ってきた。福島組は8月26日、埼玉組は8月27、28日の両日、計319名が佐渡に到着した。本来派遣した数は408名であり、この間に89名が行方不明となっている。これは埼玉、福島にいる間に逃亡したか、あるいは8月15日以後に佐渡への帰島を拒否した者である。また、敗戦によって佐渡から逃走する者、反対に帰山する者などが相次ぎ、8月末に佐渡鉱業所の朝鮮人は573名に達した。8月15日から9月11日までに、佐渡鉱山から新たに逃走した者は7名、一方帰山した者は27名だった。⁸¹⁾

佐渡鉱業所の朝鮮人は直に帰国できるものと判断し、大多数は労働に従事しなかった。福島島から帰山した3名の朝鮮人は十数名の朝鮮人とともに、共同炊事場係員に「給食量甚ダ僅少ニシテ不公平ナル分配ナリ」とその理由を詰問した。さらに、「島内ニ逃走シ居ル鮮人ニシテ常ニ社宅及寮生ト連絡ヲ為」す者がいた。このため、佐渡鉱業所では9月1日から「気分転換ヲ計ル為出稼競争ヲ実施スル」ことにし、同日から9月上旬までに平均75%~76%の出稼率を見せた。食糧は8月31日まで加配米とともに4合3勺を支給したが、9月1日以降は4合1勺に減らし、この内約5割は大豆を混入した。副食物の在庫は最低量の15日分、佐渡鉱業所経営農園で収穫した野菜などが15日分、計一ヶ月分の予定しかつかず、9月末には底を尽くことが見込まれた。⁸²⁾朝鮮人、佐渡鉱業所のいずれにしても一日も早い朝鮮への帰国が望まれていた。

(2) 新潟在住朝鮮人の帰国

新潟県内の朝鮮人は8月15日直後から早期帰国を企業、新潟県、日本政府に要求した。8月20日、新潟県警察部は内務省警保局に対し、「労計移入ノ鮮人ハ例外無ク急遽帰鮮ヲ希望工場事業主ニ対シ強硬ナ申入レヲ為シ漸次其ノ態度尖鋭化ノ微見受ケラレ」とし、「便船アリ次第可逆的速ニ希望者ヲ帰鮮セシムルノ措置ヲ講ジ度キ方針ナルガ右ニ関シ何分ノ早期御指示賜リ度」と内務省の指示を要請した。⁸³⁾各警察署は企業と協力し、朝鮮人の帰国準備を積極的にすすめた。新発田市内には日鉄赤谷鉱業所、日曹飯豊鉱山、日曹新発田工場があり、多数の朝鮮人が就業中だった。彼らの「殆どの人達が帰国を申出た。逸早く新発田憲兵隊の建物

を政府から借り受けて朝鮮人の事務所にして帰国事務を取り扱った⁶⁴⁾という。

新潟県警察部は朝鮮人の「送還輸送」に関し、新潟鉄道局と折衝し、第1次輸送として9月11日から18日にかけて県内9事業所の1280名を鉄道で輸送する計画をたてた。ルートは彼らを見送る新潟から鉄道で下関・博多に送り、ここから船で帰国させるものだった。1280名の内訳は、電気化学工業青海工場482名、海陸運送194名、新潟鉄工所168名、日本鋼管新潟工場161名、日通（新潟港支店・長岡支店）114名、昭和電工鹿瀬工場74名、新潟電工39名、上越通運25名、栗原組23名だった。⁶⁵⁾しかし、その後、下関と博多に朝鮮人が集中したため、新潟県内と東京方面の朝鮮人を新潟港から帰国させることになった。新潟港からの帰国は9月30日に間宮丸が580名、10月2日に白龍丸が1674名を乗せ、朝鮮に向かった。表4のように、全部で20事業所、2254人で、この内新潟県関係は5事業所、239名である。⁶⁶⁾

表4 1945年9月30日、10月2日に新潟港から帰国した朝鮮人

月 日	事業所名	人 数	住 所	
9月30日	富士瓦斯紡績株式会社小山工場	246	静岡県駿東郡小山町	
	陸軍航空総軍経理部第1建設部隊	135		
	株式会社日立製作所	78	東京都葛飾区大谷田町	
	関東信越軍需管理局特別作業隊	57	埼玉県比企郡高坂村大里部	
	土木建築業石田株式会社	41	東京都神田区神保町	
	中央工業株式会社	23	東京都蒲田区古川町250	
10月2日	横須賀海軍施設部第113部隊	469		
	日本鋳業株式会社北工場	403	青森県上北郡天間村	
	軍需省第250部隊竹中隊	277	東京都南多摩郡七生村	
	陸軍航空総軍田中組	103	東京都南多摩郡七生村	
	関東軍需監理部特別作業隊	98		
	古河電気工業株式会社横浜電気製作所	60		
	関東航空工業有限公司	12	千葉県船橋市宮本町6丁目	
	朝鮮連盟	8	東京都淀橋区新宿	
	陸軍航空総軍経理部東京第1建設隊	5		
	【新潟関係】			
	信越化学工業株式会社	103	中頸城郡直江津町	
	中央電気株式会社田口工場	43	中頸城郡中山村田口	
	三協鋳業株式会社村松鋳業所	39	中蒲原郡村松町	
	帝国特殊製鋼株式会社	28	中頸城郡直江津町	
日本セルロイド新井工場	26	中頸城郡新井町		
合 計		2254		

新潟県警察部長発内務省警保局保安課長宛報告（昭和20年10月4日付、特高秘鮮号外）、新潟県警察部特高課『昭和二十年内鮮関係書類・主務省報告』。朴慶植編『朝鮮問題資料叢書』第13巻（アジア問題研究所、1990年）所収。

10月2日午後4時に新潟港から釜山港に向かう白龍丸の様子を『新潟日報』は、写真入りで次のように伝えている。「波止場を離れる直前の船は悲喜こもごもの表情を持つ人々を乗せて揺れてゐる（中略）新しく出発したかれ等の祖国朝鮮へ帰る人々、その顔は喜びに輝いてゐる、しかし長年ご恩になつた日本を去る感懐を何としよう、一抹の寂しさがその胸をかすめ

るのか、複雑な悲哀の微笑みを浮べてゐる人も沢山ある」。⁸⁷⁾「複雑な悲哀の微笑み」の内実を、日本人は全く理解できていなかったのである。

敗戦直後、日本国内の朝鮮人は多くの団体を結成した。これらが総結集し、1945年10月15日、16日の両日、在日本朝鮮人連盟（朝連）中央本部の結成大会が東京で開催された。朝連は東京、鳥取、神奈川、京都、奈良などに各府県本部を設置していった。⁸⁸⁾全国的な運動の高まりの中、10月28日朝連中央本部新潟支部が結成された。会場の新潟町公会堂には約300名の朝鮮人が集まり、金判根を委員長、崔作支を副委員長に選出し、「在留同胞の生活安定と日鮮親和、新朝鮮の建設に努力することを誓った」。⁸⁹⁾この後、新潟支部は新潟支部に拡大したようである。朝連新潟支部は県内に2ヶ所の朝連学院を設置し、民族教育を行うなど、活発な組織活動を展開した。⁹⁰⁾また、朝連新潟支部は新潟港から帰国する朝鮮人に対し、支援活動を行った。11月17日、福島県下の朝鮮人労働者約3300名が新潟市内の四ヶ所に分宿した。彼らは新潟港から帰国するため新潟市内に入ったのである。船舶の入船が不調で、寒気も加わり心配されたが、朝連新潟支部の努力で混乱もなく待機中であった。⁹¹⁾

朝鮮が解放されたものの、朝鮮半島がソ連とアメリカによって分割占領されたため、佐渡鉱業所の労働者は帰国に際して、不安を抱いていた。一朝鮮人は「子供ガ家ニ帰ツテ先生カラ教ヘラレタノカ朝鮮ノ北方ハソ聯ガ南方ハ米利加ガ上陸シタノダカラ帰ル事ハ嫌ダト言ツテ居マス（中略）今朝鮮ニ帰ツタラ大変ナモノダト思ヒマス」といっている。また、運搬夫だった一朝鮮人は「今半島ニ帰ツテモ米国ヤ支那ニ使ハレルナラ今日迄ノ様ニ佐渡ニテ働イテ居タイノデス（中略）私達ハ八月十五日ニ日本ガ休戦ニナリ早く半島ニ帰ラルル事ハ喜ンデ居リマシタ」と述べている。⁹²⁾しかし、最終的には佐渡鉱業所の朝鮮人は日本での永住を希望する数名を除いて、1945年10月から12月にかけて全員帰国した。⁹³⁾

1947年10月1日現在、新潟県在住の朝鮮人は3225名（男2072名、女1153名）であり、佐渡郡は128名（男76名、女52名）で、これは全体の4.0%に過ぎない。戦前には朝鮮人がもっとも多かった佐渡郡は、県内で中頸城郡、中蒲原郡、新潟市、高田市、新発田市、岩船郡、西頸城郡につぐ第8位にまで低下したのである。⁹⁴⁾

おわりに

以上、主に戦時期の佐渡鉱山における朝鮮人労働者の労働と生活の実態を明かにした。それらを要約すれば、次の通りである。

第一に、佐渡鉱山を初めて訪れた朝鮮人は、朝鮮政府が鉱業近代化のために派遣した3名の留学生だった。彼らは宮内省御料局の佐渡鉱山学校で鉱山学を学んだ。その後、1910年代から朝鮮人労働者が佐渡鉱山に就労し始めた。彼らは「部屋制度」(納屋制度)の下で、部屋頭の厳しい統制を受ける「他国人足」、「他国坑夫」として働いたと思われる。

第二に、日本の戦時体制が進むにつれ、三菱鉱業所佐渡鉱業所は産金、さらに産銅増産に邁進した。こうした増産体制のため、朝鮮人男性が戦時動員された。1939年2月から1945年7月まで、「募集」・「労務協会斡旋」・「徴用」形式により約1200名が佐渡鉱山に送り込まれた。この内約1000名が「募集」形式であり、彼らの出身地域は主に忠清南道で、敗戦が近づくと全羅北道にも拡大された。

第三に、朝鮮人労働者は主に「運搬夫」、「鑿岩夫」、「支柱夫」として過酷な坑内労働に従事した。このため10名以上の死者、36名以上の負傷者を出した。労働条件をめぐる2件の争議が発生し、1943年6月までの逃亡者は150名以上で、その後も佐渡鉱山からの逃亡者が相次いだ。

第四に、佐渡鉱業所の朝鮮人労働者は社宅と寮で生活した。就労中に8名の朝鮮人が徴兵で戦場に送られた。朝鮮人の労働と生活は、三菱鉱業の労使協調機関である協和会、半官半民の鉱山統制会、特高警察が中心の新潟県協和会相川支会によって、三重にわたって厳しく監視された。

第五に、敗戦後佐渡鉱業所の朝鮮人は、他県からの帰還部隊も含め約570名に達した。彼らは1945年10月から12月にかけて、新潟港から帰国した。

今後は、1910～1920年代の朝鮮人労働者の実態を明らかにし、さらに佐渡鉱山史の中に戦時期の朝鮮人労働者の役割を正しく位置付けることが新たな課題となろう。

[補註]

- (1) 佐藤泰治「新潟県における朝鮮人労働者・(1)(2)」『新潟県部落史研究』3号(1980年5月)、4号(1981年5月)。佐藤泰治「新潟県における朝鮮人・ノート」、浅野好美・趙公恵「日本帝国主義下の朝鮮人労働者―県内在住・在日朝鮮人一世の聞き取りを中心に」、曹喜春「新潟港湾労働における朝鮮人強制連行・強制労働―証言をもとに」、張明秀「中津川水力発電所における朝鮮人労働者虐待・虐殺事件―「東亜日報」掲載の資料紹介」、張明秀

「新潟県在日朝鮮人関係年表」〔以上、五論文は『新潟近代史研究』3号（1982年10月）〕。
佐藤泰治「新潟県中津川朝鮮人虐殺事件」『在日人史研究』15号（1985年10月）。橋沢裕子
「新潟県における朝鮮人労働運動—新潟県朝鮮労働組合を中心に」『在日朝鮮人史研究』17
号（1987年9月）〔後に同『遺稿集・朝鮮女性運動と日本』（緑蔭書房、1989年）所収〕。新
潟県編『新潟県史・通史編8』（同県、1988年）4章2節5「強制連行された朝鮮人」（佐藤泰
治執筆）。長沢秀「新潟県と朝鮮人強制連行」『在日朝鮮人史研究』19号（1989年10月）。
〔後に梁泰昊編『朝鮮人強制連行論文集成』（明石書房、1993年）所収〕。

本稿では従来使用されてきた歴史的用語「強制連行」は使用せず、「戦時動員」を使用
する。根拠は、飛田雄一・金英達・高柳俊男・外村大「朝鮮人戦時動員に関する基礎研究」
『青丘学術論集』4号（1994年3月）262～268頁。

本稿の本文、史料等において差別的表現が多数あるが、歴史的事実を優先するためその
まま使用する。

- (2) 前掲長沢論文、1～23頁。『新潟県史・通史編8』156～158頁。
- (3) 麓三郎『増補版佐渡金銀山史話』（三菱金属鉱業、1973年）385～502頁。麓三郎は三菱合
資会社に入社、三菱鉱業に転じ、1952年に同社監査役を退任した。
- (4) 広瀬貞三「19世紀末日本の朝鮮鉱山利権獲得企図（1882～1994）」『史叢』28号（1984年10
月）37頁。李培鎔『韓国近代鉱業侵奪史研究』（一潮閣、1989年）15～19頁。
- (5) 前掲麓三郎著書、483～484頁。相川町史編纂委員会編『佐渡相川の歴史・通史編・近現代』
（同町、1995年）233～241頁。（以下、『佐渡相川の歴史』とする）。
- (6) 『旧韓国外交文書』第3巻（日案3）（高麗大学校出版部、1967年）46、214頁。第7巻（日案7）
（同出版部、1970年）480頁。原田環「乙未事件と禹範善」、河合和男他編『論集朝鮮近現
代史—姜在彦先生古希記念論文集』（明石書房、1996年）83頁。
- (7) 三菱鉱業セメント株式会社総務部社史編纂室編『三菱鉱業社史』（同社、1976年）121～
125頁。
- (8) 前掲麓三郎著書、472～475頁。
- (9) 前掲麓三郎著書、477～478頁。『佐渡相川の歴史』228頁。
- (10) 磯部欣三「佐渡金（銀）山の労働力—主要な給源地に関する考察」、地方史研究協議会編
『佐渡—島社会の形成と文化』（雄山閣、1977年）62～64頁。磯部はここで安田部屋の死
亡者まで加えた数を用いているが、ここではそれを除外した。

- (11) 前掲麓三郎著書、477～478頁。『佐渡相川の歴史』227～228頁。1910年代の佐渡鉱業所の経営について、『佐渡鉱山沿革・大正三年七月』（発行所、発行年不明）（新潟県佐渡郡金井町立金井図書館所蔵）参照。
- (12) 『佐渡相川の歴史』232～233、254～261頁。
- (13) 浅田政広『北海道金鉱史研究』（北海道大学図書刊行会、1999年）16～17頁。
- (14) 『三菱鉱業社史』435頁。
- (15) 星政之助「俺達の唄を」『建設』（佐渡無産青年同盟）創刊号（1931年11月）、山本善一郎編著『佐渡社会運動史』（社会問題研究会、1980年）108頁。三菱鉱業の炭鉱経営については、麓三郎『三菱飯塚炭鉱史』（三菱鉱業、1956年）、三菱美唄炭鉱労働組合編『炭鉱に生きる一炭鉱労働者の生活史』（岩波書店、1960年）、三菱鉱業セメント株式会社高島炭鉱史編纂委員会編『高島炭鉱史』（同社、1989年）等参照。
- (16) 『新潟県史・通史編8』663頁。
- (17) 前掲浅田政広著書、34頁。
- (18) 『三菱鉱業社史』435頁。
- (19) 「推名次官、佐渡鉱山視察」『新潟日報』昭和18年8月26日付。
- (20) 「佐渡鉱山の喜び」『新潟日報』昭和18年10月30日付。
- (21) 「増産へ頑張る佐渡鉱山 一人一貫欠献納へ」『新潟日報』昭和18年11月17日付。
- (22) 「佐渡鉱山の増産週間」『新潟日報』昭和18年12月15日付。
- (23) 「悲報に揮ふつるはし」『新潟日報』昭和19年11月3日付。
- (24) 日本への戦時動員を「官斡旋」と呼ばない理由は、広瀬貞三「植民地期朝鮮における官斡旋土建労働者一道外斡旋を中心に」『朝鮮学報』155号（1995年4月）、補注(2)、40頁参照。
- (25) 『佐渡相川の歴史』680頁。
- (26) 『佐渡相川の歴史』680頁。
- (27) 宮田節子編・解説『高等外事月報』（不二出版、1988年）昭和14年9月分、132頁。
- (28) 「産金増産へ半島から戦士三百名募集」『新潟新聞』昭和16年3月13日付。
- (29) 「佐渡鉱山へ半島労務者」『新潟日報』昭和19年7月16日付。原文は「○○名」。
- (30) 『佐渡相川の歴史』680頁。この証言は平井栄一編『佐渡鉱山史・稿本』によるものと推定される。平井は佐渡鉱山やその他の鉱山に勤務した技術者である。稿本の複写は新潟県立文書館に所蔵されているが、所蔵者（ゴールデン佐渡）の意向で非公開となっている。

- (31) 相川高等学校五十周年校史編集委員会編『相川高等学校五十年史』（同校同窓会、1973年）144、149頁。
- (32) 「坑底へ突込む勤報隊 銅増産に逞しい佐渡の協力」『新潟日報』昭和18年10月4日付。
- (33) 「突込み島乙女 佐渡鉱山勤労報国隊入団式」『新潟日報』昭和19年3月3日付。
- (34) 『佐渡相川の歴史』648～690頁。
- (35) 佐渡鉱業所「半島労務管理ニ就テ」（昭和18年6月）、長沢秀氏紹介、『在日朝鮮人運動史』12号（1983年9月）86頁。
- (36) 澤田久雄編『日本鉱山総覧』（日本書房、1940年）229頁。『三菱鉱業社史』435頁。
- (37) 「現地報告⑫登る梯子が針の山 地下五百米の鉱山戦士」『新潟日報』昭和18年8月22日付。
- (38) 「巖に増産祈願 佐渡鉱山火の玉進軍」『新潟日報』昭和19年8月4日付。
- (39) 「佐渡鉱山全従業員に徴用令書を伝達」『新潟日報』昭和19年12月20日付。
- (40) 「半島人戦士 佐渡鉱業所に約六百名」『新潟新聞』昭和16年4月14日。
- (41) 「佐渡鉱山夫の事故減少」『新潟新聞』昭和10年7月9日付。
- (42) 協調会『日本労働年鑑・昭和17年版』（同会、1943年）、張明秀「新潟在日朝鮮人関係年表」122頁より再引用。（以下、「関係年表」とする）。
- (43) 磯部欣三『佐渡金山』（中央公論社、1992年）157～158頁。
- (44) 前掲磯部論文、67頁。『佐渡相川の歴史』231頁。
- (45) 佐渡厚生農業協同組合連合会年史編集委員編『年史—45年のあゆみ』（同会、1982年）5頁。
- (46) 「佐渡鉱山が半島労務者指導」『新潟日報』昭和19年3月24日付。
- (47) 内務省警保局『特高月報』昭和15年3月分。「関係年表」、122頁。前掲長沢論文、23頁。『佐渡相川の歴史』682頁。『特高月報』は、朴慶植編『在日朝鮮人関係資料集成』第4・5巻（アジア問題研究所、1976年）所収を使用した。
- (48) 『特高月報』昭和15年4月分。「関係年表」、123頁。前掲長沢論文、23頁。『佐渡相川の歴史』682頁。
- (49) 『佐渡相川の歴史』682頁。
- (50) 『佐渡相川の歴史』682頁。
- (51) 『特高月報』昭和18年2月分、「在留朝鮮人運動日誌」（1943年1月～1944年11月）。「関係年表」、123～124頁。前掲長沢論文、7～8頁。
- (52) 田中圭一『島の自叙伝』（静山社、1982年）57頁。

- (53) 兵庫朝鮮関係研究会編『地下工場と朝鮮人強制連行』（明石書房、1990年）150、160頁。
『佐渡相川の歴史』682～683頁。
- (54) 「相川の食糧増産運動」『新潟日日新聞』昭和17年4月8日付。
- (55) 「新潟県協和会相川支会之美挙」『新潟県社会事業』1941年1月号、36頁。（新潟県立図書館所蔵）。『新潟県社会事業』掲載の朝鮮人関連記事の一部は、樋口雄一編・解説『増補新版・協和会関係資料集』第3巻（緑蔭書房、1995年）所収。
- (56) 「飛躍的に上昇 佐渡鉱山の貯蓄」『新潟日報』昭和19年9月29日付。
- (57) 「佐渡の賭博」『新潟新聞』昭和16年4月19日付。
- (58) 『特高月報』昭和17年5月分。「関係年表」123頁。
- (59) 「半島人の悪事」『新潟日報』昭和19年7月28日付。
- (60) 「征け聖戦へ 佐渡鉱山の半島出身者産業戦士に翼賛支部が激励」『新潟日報』昭和18年8月4日付。
- (61) 「半島の壮丁練成 二十日間大日ヶ原で」『新潟日報』昭和18年8月3日付。「誇らしい自覚を持ち 半島壮丁合宿訓練終る」『新潟日報』同年10月9日付。中村海八郎「戦ふ半島壮丁一大日原練成を視り」、「県内在住朝鮮人壮丁練成」『新潟県社会事業』1943年11月号、15～16、21～24頁。
- (62) 「光栄と感激に溢れ 佐渡鉱山から半島青年晴の入隊」『新潟日報』昭和19年9月6日付。
- (63) 『三菱鉱業社史』305、313頁。
- (64) 「佐渡に協和会館」『新潟日日新聞』昭和16年11月12日付。
- (65) 「佐渡鉱山体練大会」『新潟日報』昭和18年6月16日付。
- (66) 『三菱鉱業社史』334～337頁。
- (67) 樋口雄一『協和会一戦時下朝鮮人統制組織の研究』（社会評論社、1986年）91頁。
- (68) 芝田左一郎「本県の協和事業概要に就て」『新潟県社会事業』1941年9月号、『新潟県史・資料編19』775～780頁。
- (69) 「アリラン語講習会 警察練習所で開催」『新潟新聞』昭和16年3月22日付。
- (70) 五十嵐棊「協和事業婦人講習会を終りて」『新潟県社会事業』1940年7月号、『新潟県史・資料編19』773～775頁。
- (71) 「協和事業男子講習会終了」『新潟県社会事業』1941年3月号、34頁。
- (72) 「協和会相川支会に於ける移住半島人労務者の戦勝祈願祭執行」『新潟県社会事業』1942年

- 1月号、31頁。
- (73)「募集朝鮮人労務者に関する懇談会開催」『新潟県社会事業』1942年1月号、26～29頁。新聞では「半島人労務者に関する懇談会」開催となっている。「半島人労務懇談会」『新潟日日新聞』昭和16年11月12日付。
- (74)「協和事業補導員練成大会」『新潟県社会事業』1942年2月号、29～31頁。
- (75)「昭和十七年度県協和会事業計画」『新潟県社会事業』1942年2月号、15～16頁。松本明錫「補導員移動講習会感想」『新潟県社会事業』同年7月号、15頁。
- (76)「協和事業補導員練成講習会」『新潟県社会事業』1943年7月号、21～22頁。
- (77)『新潟県史・通史編9』10頁。
- (78)糸魚川警察署長発新潟県警察部長宛報告（昭和20年8月16日付、特高秘第1423号）、新潟県警察部特高課編『昭和二十年内鮮関係書類綴・警察署長報告』（国立公文書館所蔵）。（以下、『警察署長報告』とする）。朴慶植編『朝鮮問題資料叢書・第13巻・日本敗戦前後の在日朝鮮人の状況』（アジア問題研究所、1990年）所収。前掲長沢論文、15頁。
- (79)新発田市史編纂委員会編『新発田市史』下巻（同市長、1981年）654頁。
- (80)中央電気工業株式会社「四十年史」編纂委員会編『中央電気工業四十年史』（同社、1975年）68頁。
- (81)相川警察署長発新潟県知事宛報告（昭和20年9月11日付、特高秘発第1218号）『警察署長報告』。『佐渡相川の歴史』683頁。
- (82)同上。
- (83)新潟県警察部長「在住鮮人ノ取扱ニ関スル件」、『新潟県史・資料編20』9～10頁。
- (84)藤崎貞護「終戦当時及その後のおもいで・三」『護光』（新潟県警察本部教養課）1958年12月号、35頁。（新潟県立文書館所蔵）。藤崎は敗戦当時、新発田警察署長だった。
- (85)新潟県警察部長発内務省警保局保安課宛報告（昭和20年9月13日付、特高秘鮮号外）『警察署長報告』。前掲長沢論文12～13頁。
- (86)新潟県警察部長発内務省警保局保安課宛報告（昭和20年10月4日付、特高秘鮮号外）、新潟県警察部特高課編『昭和二十年内鮮関係書類綴・主務省報告』（国立公文書館所蔵）。前掲朴慶植編『朝鮮問題資料叢書』第13巻所収。前掲長沢論文、12頁。
- (87)「さらば新潟 祖国朝鮮への感無量の船出」『新潟日報』昭和20年10月4日付。
- (88)朴慶植『解放後在日朝鮮人運動史』（三一書房、1989年）48～70頁。

- ⑧9 「朝鮮人連盟新津支部結成」『新潟日報』昭和20年10月31日付。
- ⑨0 新潟県警察史編さん委員会『新潟県警察史』（同会、1959年）926～927頁。
- ⑨1 「帰国を待つ半島労務者」『新潟日報』昭和20年12月4日付。
- ⑨2 相川警察署長発新潟県知事宛報告（昭和20年9月11日付、特高秘発第1218号）『警察署長報告』。
- ⑨3 『佐渡相川の歴史』684頁。
- ⑨4 新潟県「昭和十年～二十二年新潟県統計書」、『新潟県史・資料編19』782頁。

[付記]

本稿は、1989年3月に朝鮮資料研究会で行った報告「戦時下、新潟における朝鮮人強制連行一鉱山を中心に」をもとに、大幅に加筆したものである。当時、国立公文書館と新潟県内で史料調査の機会を与えていただいた田中明氏（拓殖大学海外事情研究所顧問）に心より感謝いたします。